

## アトピー性皮膚炎の治療編

今回は治療法について考えてみましょう。前回、アトピー性皮膚炎(アトピー)はアレルギーだけでなく、皮膚のバリア機能の低下(体質)も強く関係していること、スキンケアが重要で、清潔を心がけ、保湿剤を用いるだけで症状が改善することを説明しました。

アトピーが話題になる理由は、なかなか治りにくいこと、つまり難治症であることです。治らないからこそ、さまざまな治療が提唱されているのです。簡単に治るのであれば、ここまで混乱はしていません。もちろん、皮膚の病気で治療の中心は、軟膏療法になります。スキンケアで改善しないような、掻き傷が付く痒みやジクジクする場合が治療の開始の目安です。用いられている軟膏で有効性と安全性が科学的に立証されているのはステロイド剤です。しかし、軟膏療法は皮膚の表面の炎症(湿疹)を押さえるのが目的なので、あくまでも対処療法です。そのような理由から軟膏を塗っている間は調子がよく、

やめるとひどくなるということは、ある程度仕方ないことなのです。

アトピー治療の到達ポイントはどこに置いたらいいのでしょうか。目的は治すということよりも、苦痛をとってあげることと考えましょう。副作用が強調されるあまり、子どもの体が掻き傷だらけで血がにじんでいてもステロイド軟膏を拒否することがあります。果たして正しいのでしょうか。誰でも眠れないほど痒ければ翌朝は大変です。そんな毎日の繰り返しでは、子どもの発達や発育に影響を及ぼしかねません。子どもの苦痛を取り除き、より良い生活環境を提示することは、親の義務であるはずで、かかりつけの先生の考え方や説明を良く理解して軟膏の種類や塗る場所・回数など、指示を守って使用すれば、十分な効果があり副作用も怖いものではありません。他には、免疫抑制剤の軟膏の使用が小児でも許可され、効果を上げています。

さて軟膏療法でコントロール出来

ない場合には、内服薬が必要になることもあります。内服薬としては、痒み止めと抗アレルギー剤があります。抗アレルギー剤は長期に使われるもので、時に体質改善の薬として処方されることがあります。しかし、アレルギーの反応を抑える薬であって体質を変えるもの(治す薬)ではないことを理解して下さい。

薬剤でコントロールが不十分な場合には、食事療法が考慮されます。単品のアレルギーの場合には、除去することの問題は大きくありません。代わりの食品によって、栄養を補えるからです。しかし、多種類のアレルギーの場合には、発育や発達も同時に考えなければなりません。皮膚がきれいになることと栄養とは、どちらが大切か言うまでもありません。お母さんたちに「皮膚と脳のどちらが大切？」と聞くと迷わず「脳」と答えるにもかわらず、目の前のことだけ見ている親御さんには皮膚の赤さや痒さが強く大きく見えてしまいがちです。目の前の現在よりも、将来を見据えた治療が大切なこともあることを理解しましょう。悲しいことですが極端な除去食のため、栄養失調や脚気で入院したという話も伝わってきます。

アトピーの治療に関しては、こんなとんとしている状況なので、医師によっても診断や治療法が異なるのが現実です。安心して治療を受けるためにはコミュニケーションがとめても大切です。十分な説明を受けて理解した上で医師の指示のもと、治療を続けることが重要です。また、患者さんの弱みにつけ込んだ治療法(アトピービジネス)によって経済的肉体的被害が問題となっています。良いもの悪いものを見極める目を持つことも、大切なことです。そして、上手に付き合うという意識が必要かもしれません。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたった。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会バネリストとして選ばれる。  
AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。  
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>